

林業技術センター  
普及班便り  
(第11回目)

# ◆あなたの山づくりを応援する林業普及 【いわての林業経営者 その2】 山ぶどうのおじさん！

## 一 はじめに

平成20年度も普及班便りでは、県内の「林業経営者の経営事例」についてシリーズで紹介しています。

今回は、特用林産である山ぶどうを主業とした農林業に取組む盛岡市湯沢の菅原義三郎さん（82歳）をご紹介します。

## 二 人物紹介 【プロフィール】

菅原さんは大正15年紫波町日詰の農家に生まれ、20歳の時現在の地（諏訪開拓）に開拓団として入植しました。その地は松林と雑木林だけの山・山・山、33ヘクタールに10人で入植、来る日も来る日も木の株を掘り起こす毎日、ようやく畑らしく耕したもののやせた土壌では満足な作物が収穫できるはずもなく苦しい開拓生活だったと、当時から今日の姿は想像も出来なかったと当時を振り返りながら、今も現役で意欲的に農林業経営に取組んでいます。



菅原さん本人の「開拓魂」像

## 三 経営の内容

### (1) 山ぶどう栽培への転換

菅原さんが最初に手がけたのは開墾した畑の土壌づくりからでした。大量の堆肥を入れながら雑穀や野菜などを中心とした農業経営を行っていましたが、昭和45年に畑の一部に栗の木300本を植栽し、栗栽培を始められました。当時栽培栗が市場で珍しかったこともあって、高い値段で取引され、シーズン中毎日平均300ネット（1キログラム入り）出荷〇〇百万の収益を上げ「大もうけ」したと話していました。その後、クリタマバチなど病虫害の発生もあつ

て、徐々に栗から果樹（りんご）栽培に移行し、りんごと水稲（畑を開田）の経営形態となりましたが、りんごの剪定作業等、年齢と共に高所作業が辛くなり、何か変わる作目がないものかと思案をしていました。

そこで、以前から興味を持っていた「山ぶどう」に着目し、平成13年、20アールの畑に市販山ぶどう苗を約100本、平成16年に岩手県オリジナル品種「涼実紫」を30アールに150本植栽して、経営形態を山ぶどう主体とした経営へと切換え、本格的な山ぶどう栽培に乗り出すこととなったとのことです。

### (2) 自助努力による経営

まだまだ山ぶどう栽培が、経営と言えるような時期でもない時に、まとまった本数を植栽する決断をして栽培に踏み切り、また、未知の栽培技術を他人を頼ることなく自ら情報収集して技術を習得し今に至っています。一方、生産された果実を、県内でもさきにかけて個人で数少ない「山ぶどうジュース」を製造（委託）販売して、販売先も自らの「足」で開拓し、販路を確保しているなど、「開拓魂」が、菅原さんの全てを物語っています。

### (3) 山ぶどう栽培が農林経営の柱

昨年は、栽培面積50アールから約3トンを取れました。その中から2.5トンを出荷しジュースに加工し、1800ミリリットル入り150本、1000ミリリットル入り1300本、300ミリリットル入り150本を町内温泉施設を中心に販売する一方、昨年から「山ぶどう狩り」を始めたところ大盛況であったので、続けて今年も開放したいと意欲的。今では、租収入の8割が山ぶどうからの収入が占めるまでとなっているそうです。



経営する山ぶどう栽培圃

## 四 おわりに

普及班便りでは、これからも随時県内の林業経営事例の紹介を行っていく予定です。皆様様の地域で取り上げてほしい方がありましたらご連絡ください。

林業技術センター普及班